

体験版

HEADPHONE GIRLS COLLECTION

ヘッドホン・ガールズ・コレクション

スズキケイ

ヘッドホン・ガールズ・コレクション

スズキケイ

プロローグ 秋葉ワンダーランド

秋葉原。そこは……、

最先端をゆくファッションの町。

メイドさんとか、若い女性は、たいていコスプレをして町を歩いている。すばらしい非日常ゾーン。デイズニerlandを超えるファンタジーと不思議の町だ。

先鋭化した商業とアートの町。

多種多様な同人誌や創作品が売られ、転売ヤーが暗躍し、大金が動く。ごった煮の増埒の中から新しい創造が生まれるポップアートの聖地だ。

エロゲの町。

役所やら駅の中やらビルの全体やら、公共の場所に堂々と、めっちゃエロいヒロインたちが、さも普通の清楚な美少女のように佇み微笑んでいたりする。他のどこにも存在しない妖精の国ネバーランドだ。

そして、そこはなによりも、古より伝わりし伝統の電機の町であった。

でっかい電機の音響機器専門店に様々なヘッドホンが並んでいる。

メーカーごとに特徴を備え、形も色も様々だ。

一人の制服JKが、店頭でヘッドホンを取り、音楽を試聴する。笑顔。

手足のリズム。

陶醉する表情。

雑踏、日常、時間の連続性が消え、音楽のエクスタシーに没入する。
ダウンビートからアップビートへ。
アキバの青空と、弾む心の中へ、広がってゆくメロディー。

突如、少女の身体を電磁パルスが突き抜け、身体が切り裂かれるようなイメージが襲う。

脳内にサブリミナルなメッセージが侵入してくる。

『再生、再生、再生、再生』

ヘッドホンのキャッチコピーが脳内を流れる。

『バーチャルはすべての障壁を超える』

1 美少女陰謀論

鉄道高架線の上の跨線橋で、ネットニュースのヘッドラインをスマホで見るJKが一人。

オーバーイヤータイプのヘッドホンをかけ、スマホを片手に行きすぎる電車をぼんやり眺めている。

音楽を聴くでもなく、見ているニュースは、連日の飛び込み。

土曜の真昼。

伸びやかな青空の下の、端正だが暗く生氣のない顔。

足元に置かれた重量感のある学生カバン。

『こないだのテストの成績……悪かったなあ。はああ』

気晴らしに音楽を聴いても、思考は現実から離れず、重圧感のある日常の中を漂っている。

と、

突如ヘッドホンの外から入る物音に、平静が破られ、驚愕しながら視線を向ける。

「うがあああああーっ!」

野獣のような咆哮がコンクリートに響き渡る。

「このクソゴミがああああっ!」

目の前で起こるストリートファイト。

少女同士のケンカだ。

よく見るとメイド服とチャイナ服のコスプレ少女が取っ組み合ってバトルの最中。

「(は? なにこれ。メイド喫茶間の縄張り争い? アキバ系半グレ不良少女の抗争か?)」

ヤンキーっぽくない清楚な美少女どうし。

しかしケンカの様子は派手で、罵声が飛び交い、すでに手足が擦り切れ流血沙汰。

異様な情景に見とれつつ、腰についている劣勢のメイド服を助けようと、ふらふらとJKが止めに入る。

「あっ、バカっ! 近寄っちゃダメだ!」メイド服少女が瞬時に背面飛びで立ち上がり、声を上げた。「こいつ私たちが見えてるのか!」

部外者に気を取られ、一瞬静止したメイド服へ、一撃をかまそうとチャイナ少女の光速右ストレートが飛んだ。その時、体を避けつつカウンターを狙ったメイドの振り上げた左手が、うっかり背後から助けに入ったJKの顔面にヒット。

はぐう! とつぶれたカエルのような声をあげ、地面にふっとばされる。

痛みから涙目で目を開け、気が付けば、目の前から二人が消えている。

誰もいない跨線橋に尻をついている自分。

「や、やばい。私とうとう、こわれた……のか」

地面に飛び落ちたヘッドホンを呆然とひろって、のろろと立ち上がる。

「白日夢なのに、痛みだけは残ってる……」ほっぺをさする。「なんて最悪な日だよ」

落ちる涙。

*

自宅に帰って確認する腫れたほっぺた。

「物理現象として、たしかに跡が残っている不思議」

混乱する頭を鎮静化しようと、ヘッドホンをかぶり、顎を机に乗せてPCのスイッチを入れ、つかの間の憩い、ネット生配信のサイトへ、アクセスする。

もはやテレビは廃れ、みなネット中心の生活。

ライブ配信は特に流行している。

多種多様な人たちが、人間博物館のごとく、きままに生の生活をネットでダラダラ流す。

配信者は老若男女、素人企画物、芸、カラオケ、時間つぶしのゲーム配信など、笑いと同時に、時に狂気を帯びた緊張感とアングラ感が漂い、エロスとタナトスも交錯する。

ふいに眼前に現れる列車に碎かれ鮮血をまき散らす人体。

火炎に包まれ炭化してゆく人。

動脈リスカ、未成年男女の売りに買い。ドラッグのOD。

生の一瞬を自己のドキュメンタリーとして配信する者たち。

のどかな時間の流れの中に、緩やかな日常を跳び越す生命の閃光が差し挟まれ配信される。

二十一世紀初頭に始まったニコニコ生放送が先駆だといわれている。

ぼんやりみつめるPCの画面から、手に包帯を巻いたメイド少女が目飛び込む。はっとしてJKは飛び起きる。

「今日も外で奴らに襲われました」と跨線橋で喧嘩していたメイド少女が深刻そうな顔でしゃべっている。

ええー。のコメント列が画面に流れる。

「というわけで、この世界の裏には、悪の秘密組織がはびこっているの。世界を動かす巨大な悪の組織が。わかってくれますよね」

例の陰謀論ですか。とのコメント。

「そう。それはショッカーであり、死ね氏ね団であり、ダークであり、バオーのドレスだったりするの。わかりますよね？」

コメント。わかりますーん。

「どっちだよ！」

聞いたことあるけど、固有名詞が古すぎ。昭和のオヤジかよ。

「だから、クロニクルなんだよ。今の日本はバーチャルリミックスなの。悪の組織の固有名詞はすべて象徴なの」

わからーん。

「おまえら危機意識がたりん。Pたん神父を見習え。アポカリプスなんだよ。終末なんだよ」とメイドが力説する。

P神父ってただのあほやで。のコメ。

「それはたしかに。あれは融通の利かない頑固爺のあほだよ。でもね、あんな異端カルトの配信者にも見えているものが一理あるんだよ。もしかしてP神父は、バーチャルネットワークのSOS信号をばけた頭で受信して、無意識にコーディングしてから、まさに黙示的なメッセージを発信しているのかもしれないんだよ？」

いみがわからんww。

メイドは陰謀論がお好きって、最近の流行らしいよな。
ねえよぼけ。

それより、ふとももみして、しりとか胸も。

などと、有意義なコメントが通過する。

「あつ、ドーもー。その彼女っ」とメイドが態度を改め、カメラの向こうを凝視。

「今日わたしを助けてくれたJKだね。ありがとう」

web会議のソフトなど使用していないのに、なぜか画面の向こうの配信者から、直に個人を特定される言動が飛んできた。

「え」身構えるJK。「なぜ画面越しにこっちがわかる？ カメラなんか使ってないぞ私」

「顔が腫れてるね。どうしたの？」心配そうな顔。

「お、お前に、ななななぐられたんだよ」怒り心頭の脳内で呟く。

「はい？」すごく可愛い笑顔。「私、生まれてこのかた、人を殴ったことなどございません」口を動かさず、テレパシーが飛んでぎ——。(A。)(——」

混乱、悩乱、錯乱、のハイパーリミックス。

相手の邪気のないかわいさに、さらに怒りが増幅し。

「嘘つくな、ぶりっ子ーっ！ 痛かったんだからっ！ 助けてあげようとしたのに。バカあああ！」JK激怒。嫉妬アタック。

相手の少女が椅子から飛ばされ、漫画のように逆さに壁にめり込んでいる。

画面が真っ暗になり、配信が切れた。

「……なんか、世界が、おかしい。やっぱり私、気が狂った、の、か？」呆然とするJK。

2 聴こえないCM

『バーチャルはすべての障壁を超える。

ZONE社のヘッドホンガールズキャンペーン。

今、ゾーンのヘッドホンを買うと、女性限定ですてきなプレミアム商品をプレゼント』

JKが聞くCM音楽。

ユーチューブを見ている。

学校の教室。

JK。自分の席に腰かけ、考え込んでいる。

勉強のしすぎだろうか。最近睡眠不足だったし。もっと自分に合った進学先を探そうか。無理をしすぎたのか私。はああ。

机の上に愛用のヘッドホンを置き昨日のことなどを考えている。

「いいヘッドホンだね。どこのメーカー？」クラスメートが声をかける。

「ZONE。新興のメーカーらしいけど、今、CMをじゃんじゃん流してる」

「ふーん。ZONE……聞いたことないな。テレビCM？」

「つべとかネットのCM。すごくよく聞くよ。ヘッドホンガールズ・キャンペーンっての」

「いや、知らない……。ネットは私もよく見てるけど」

友人がもう一人に尋ねる。

「知ってる？」

「うーん。聞いたことない」

「知らない……って？」

JKは意外に思い、手に持つヘッドホンを見つめる。

メーカーの刻印『ZONE』。

日本製。

不安げにスマホで検索してみると、企業のホームページがトップにでてくる。

「なんだ。住所が載ってるじゃん。ちゃんんと実在するわ」自分を疑ってしまうほど不安定。「どこが悪の秘密組織よね。あいつめ」美人メイドの笑い顔が脳裏をよぎる。

眉をしかめながらJKはつかつかと教壇に立ち、騒がしい教室を一望する。

「諸君、静粛に願う。静粛に静粛に静粛に」テンションの上がった声が教室に響き、話し声が止む。教室の一同は教壇のJKを見つめる。

「皆の衆に質問がある」

シーン。

「そこもどらは、ゾーンという企業をご存じか？」

JKは手に持つ愛用ヘッドホンをかざす。

「ZONE社。ヘッドホンを造っているらしい新興の音響機器メーカーなのだが、知ってる者、挙手してみてください」

「ZONE？ ……しらんなあ」

「俺もしらん」

「聞いたことないです。委員長」

「ない」

「何のアンケートだ？ マーケティングの課題ですか」

「でも言葉使いがなんか変だよ」

「桃華ちゃんは江戸生まれ？」

「ここもどらはしらんでござるな」

始業のベルが鳴り、JKこと桃華は考え込みながら席に着く。

あれだけ大量に宣伝CMを流しているのに、みんなスマホもネットもPCも使い慣れているのに、誰も知らない。

*

休憩時間、屋上から見晴らす校庭には、男女が球技で遊んでいる。

桃華は一人、暗い顔。参考書など手に持っていて読む気も起きない。

『ヘッドホンガールズキャンペーン』

傍らに置いたつけっぱなしのヘッドホンから、例のネットCMが流れ始めた。

桃華は急いでヘッドホンを驚掴み。

周辺を見回すと、クラスメイトボッチ同盟・地味子が屋上で一人でぼんやり空を見ている。

「きいてきいて、これ、これ、これ、これなのよーっ」

地味子に向かって駆け寄り、ヘッドホンを強引に被せる。

呆然とする地味子。

「ネット女子と知って質問。このCM聞いたことないですか？ 地味子さん」片耳へ向けて大声で聞きまくる。

親しくもないクラスメイトから、あだ名で呼ばれたうえに変な質問をされ困惑した顔の地味子、それでも桃華の意味は理解し、

「この音楽？」

「そう。今ヘッドホンから漏れて鳴っているCM」

「CMなんて聴こえないけど」

「…えっ」

「ネットの音声は聞こえる。ユーチューブの動画よね。言葉は聴こえるけど、音楽は流れてないな」

「…聴こえないの？」

スマホの画像を確認すると、画面に流れているのは、別の動画だった。

流れてしまったのか。

「でも音質のいいヘッドホンみたいね。私も買おうと思ってるのこのタイプ」地味子、

笑顔。「低音の効くZONY-MDR」

「ZONYじゃないの。ZONE。私はアキバで買ったんだけど。今、キャンペーンの期間中だそうだし」桃華も推し。「買ってみて、ぜひ試してみて」

「キャンペーン？」

「そう。ヘッドホンガールズキャンペーン」

「んー、委員長、朝みんなに聞いてたけど、私も聞いたことないなあ、そのCMは。ネットはつけっぱなしで毎日、見てますけど。アキバもよく行くんです。でもZONEというメーカーは初見」と言っってヘッドホンを桃華に返す。

桃華の顔に影が落ちる。

「メイド陰謀論……」

「はい？」

「悪の組織……。まじか……。」委員長、桃華、ぶつぶつ独り言をつぶやきながら、ヘッドホンを被って、立ち去ってゆく。

ZONEヘッドホンガールズキャンペーン。流麗な音楽のCMが、ヘッドホンからくどいぐらいに流れている。

「あいつ……」

美人メイドの舌だし顔が脳裏に浮かび、不快な気分で桃華は眉をしかめる。

3 見えない企業

「ふーむ……。ナンパなメイド喫茶かと思ったたら以外に渋いわ」桃華は呟く。

秋葉ジャンク通りにある喫茶店『東京迷宮』。

ジャズが鳴っている薄暗い店内。

音響が電気街仕立てで、すごくいい。

客はちらほらいるが、みな単独でジャズに聞き入っている。

制服姿のJKなど一人もいない。

メイド服で給仕している若いアルバイトの女の子がカウンターの近くにいます。

「いた。あの子だ」

メイド服のキャプチャー写真で検索をかけたらすぐにここが見つかった。

近くのテーブル席に座ると、すぐに注文を取りに来た。

「アイスコーヒーを」ジロリとメイドを見つめつつ桃華は言った。

「またお会いしましたね。通りすがりのメイドさん」

メイドは怪訝な顔をする。

「ぐーパンチはとっつても痛かったです。忘れられないほどに」桃華が言うと、メイドの顔が一瞬ひきつる。

「あの、何かの間違いでは？ お客様。人違いと存じます」冷静な対応でしらぬふり。

「そうですか。失礼しました」桃華も知らんぷりで調子を合わす。面と職場が割れた名札に書かれた名前は、『斎藤蘭』。とりあえず、じつくりと探らせてもらおうわ。私は粘着質なんだからっ。

と、喫茶店から、あの音楽が、突然、聞こえてきた。

ジャズの音響にかき消されることもなく、はっきりと脳内に聞こえる。

またテレパス現象が起こった。

ヘッドホンガールズコレクションのBGM。

何かのアラート音らしいがマナーモードで消音されている。しかし鼓膜ではなく、時空を超えて身体全身に響き渡ってくる。

桃華は緊張してメイドを注視する。

メイドが慌ててカウンター内に戻り、棚に置かれた自分のバックを開けている。

「あの子もテレパスだ！」と桃華は気づいた。

メイドが手荷物から何かを取り出そうとした時、中の物が床に落ちた。

オーバーイヤータイプのヘッドホンだ。メーカーはZONE。

自分のものと色は違うが、跨線橋であるメイドが付いていたやつだ。

桃華はメイドの腕を掴む。

「そのヘッドホン、どこで買ったの？」真剣な顔でつかんだ腕を離さない。

神田万世橋。

あたりは夜。

アキバのビルの光が神田川に映っている。

桃華と私服に着替えたメイドが橋に佇んでいる。

中央通りを走る車のヘッドライトがメイド少女の横顔を照らす。

やはりモデルのような美人だ。

「陰謀論について、詳しく聞きたい」桃華は言う。

「私の周りにも変なことばかりが立て続けに起こるし」

欄干の下の暗黒から神田川の水音が響いている。

「原因がこのヘッドホンにあることは、なんとなく思い当たる」

桃華はメイド少女を見つめて言う。

「ゾーンの本社ってこの近くにあるよね。電器街の一角に。知ってる?」

「知ってるけど」メイドは答えた。

「ちょっと外観だけでも見てみたいの。連れてってほしい」桃華はメイドに詰め寄る。

「むり」

「どうして」

「見えるわけではないもの。ZONEはこの世には実在しない企業だから。バーチャルにしか存在しないの」

「実在しない企業の製品が、なぜ私たちには買えたわけ?」桃華は手に持つヘッドホンを突き付ける。

「幽霊に、捕まっちゃったからよ」

秋葉のネオンがメイドの顔を彩る。

「私たちは今、幽霊の世界にいるの」

人ごみのざわめき。

万世橋の向こう側。

群衆が集まり、神田川の岸辺を見てざわついている。

桃華とメイドが、吸い寄せられるように駆け寄る。

ヘッドホンから、例のBGMが流れ始めた。

仲間が近くにいると、テレパスに感応してBGMやCMが鳴り出すんだ、と桃華は思った。

岸に倒れているはず濡れの女性がいる。

セーラー服を着た女学生だ。

生きているのか死んでいるのか、倒れたまま全く動かない。

手にZONEのヘッドホンを握っている。

遠くから見てもそれが何かわかる。

身体が感じている。

「ヘッドホンガールズコレクション。今ZONEのヘッドホンを買おうと、女性限定で素敵なプレゼントが当たるキャンペーンを実施中。みんな命がけで参加してね。命がけで

——」
CMがそう告げている。

パトカーと救急車の赤い回転灯が近づいてくる。

「ちよつと、これは、なに？」青ざめ恐怖に震える桃華。
メイドを振り向く。

ヘッドホンの刻印。ZONEが怪しく夜に光っている。

4 WW生放送

学校。

桃華はさらに深刻な顔で考え事。

「ZONEの守備範囲は秋葉なの」昨日の夜、メイドは言った。「だから秋葉周辺がバトルの現場になる」

「なにバトルって?」

「そういう設定のMMOなのよ。これは」

「ゲームってこと?」

「そう。現実を使ったゲーム」

「委員長さん」

不意に声をかけられて、桃華は現実に戻る。

と、席の後ろに屋上ボッチ同盟の地味子がにこにこしながら立っている。

「私も買ったよ。ほら、委員長のおすすめのヘッドホン」と言っただけで頭には製品を見せる。

「えっ」桃華は驚いてメーカーのロゴを見る。

確かにZONE社の製品だ。

「そんなに簡単に買えちゃうの。(幽霊企業の陰謀商品が……)。どど、どこの店で買ったの? 地味子さん」

「秋葉の量販店でみつけました。たしかに数は少ないみたいです。ってゆうかクラスメートの名前ぐらい覚えてください。委員長」と笑う。

「あ、ごめんなさい。水戸上子^{みとかみこ}さん。ミトカミちゃんよね」

「そ。ハンドルもそれなんだ」

「ハンドル?」

「うん。あとで話そ」といって水戸上子はニコニコしながら自分の席に戻る。めったに人に話しかけないコミュ障地味子がウキウキ楽しそうに委員長を遠くから見つめている。

*

「私、配信をやっているんですよ」と水戸地味子こと、上子は言う。

「実は委員長の配信も、一度だけ見たことがあるんです。WW生放送で」

WW生放送。

WW「ワールドワイド」に引っ掛けた略字だが、正式名は「わらわら」生放送と言う。小さなIT企業が始めた業界シェア最小の一般人はほぼ知らない超アングラな配信サービスだ。

零細ゆえに規制が緩く、配信内秩序はリスナーの自治にまかされ、何でもありの辛辣なコメが大半。しかし少数派ゆえの一体感があり、隠れた人気があった。

そう。桃華もネット生配信をやっていたのだ。

受験に専念するため離れているが、WW生放送にはコミュニティを持っている。

「ほんと私も知っています」水戸上子は決然として言った。

「なにを？」

「ZONEのキャンペーン。ヘッドホンガールズコレクション」

「え！」

「誰にも聞こえないCM。怖かったから誰にも言えないでいた」

「ほっとしてるんです。話せる相手がいて」泣きそうな顔の水戸上子。

「とっても心強い委員長さんだし」

「ミトちゃん」桃華はコミュ障地味子のけなげなようにすにきゅんとなる。

「委員長じゃなくて桃華と呼んで。名字の西田でもいいよ。もう私たち秘密を共有しあう仲間なもの」

「なかま……」上子は少し顔を赤くする。「ナカーマ、なのです、桃華さん」

「え？ うん。そ、そう。ナカーマです。ちゃんねらーもやってたの、ミトちゃん？」

「ネットしかお外との接点がなくて……」うっかり秘密を知られて少々慌てる。が、ナカーマ意識はもう水戸上子の心のバリアーを取り去った。

「私、ずっと家庭でも学校でも一人だったから、ほんとに友達が欲しかったのです」顔を赤くして、しみじみ話す。

「私って、ネグレクトされて育ったから。人との接し方がわからなくて」

屋上でいつも一人で過ごしていた水戸上子、ミトちゃん。

手にいつもタブレットやノートパソコンを持って読書していたから、一人が好きなものだと思っただけでも教室でも、距離を置いていた。

桃華はどちらかということ、一人が好きならほうで、勉強も好きだから孤独は都合がよかった。

しかし、趣味を共有しあえる友もいいものだ。と思った。
たとえそれがネット陰謀論であったとしても。
深刻であればこそ、結束も強くなる。

*

放課後。

西田桃華と水戸上子は連れ立って集合場所の秋葉原駅前の一角へたどり着いた。
少し遅れて、私服姿のメイド、斎藤蘭が合流した。

ヘッドホンガールズ三人の出会い。

それぞれZONEのヘッドホンを首にかけている。

無言で感じる親近感。

言葉いらずのつながり。

三国志の桃園の誓い、みたいなものを桃華は感じ取った。私が劉備だ、と桃華は思う。
話はすぐに緊張したものとなった。

「私を狙ったチャイナ服の女がいたでしょ」メイドの斎藤蘭が言う。

「あの跨線橋で？」と桃華。

「そう。あれがついきんに属する光速乙女団の連中だよ」

「ついきん、ってなに？」二人が聞く。

「解説しよう」メイドが言う。

『つついキャッシング』

貸金ではない。ライブ配信を提供するサービスの名だ。もちろん現実には絶対に存在しない。モデルも存在しない。まったく架空のバーチャル企業だ。一般人には秘匿された会員制の幽霊サイトだが、しかし業界シェアはトップを誇る。

リスナー会員は富裕層が多く、ネットトレードあたりで稼いだあぶく銭を、つつい配信者に大量に投げてしまう。スパ金すばらしい（スパー・金かね）、という直なネーミングの投げ銭システムを実装している。ユーチューブに対抗していることありありだ。当てつけと
言っている。

配信者は厳選された若い女性のみ。現ナマが好きな現金な若い女子に人気で、美少女たちが、どこからともなく闇ルートを伝ってこの配信界にまぎれこんでくる。

「世の中銭やで。業者と呼んで。乞食と呼んで。でも金をください」

「このデジタルの数字が増えてゆく感覚がたまらんだわぁ。レッツゴー承認欲求！」

などという誰も知らないキャッシングコピーで誰も知らないCMを流している。實際耳をふさぎたい。

しかし、このジャパニーズ配信ドリームの規模は世界ランカーユーチューバーの収入を猛追する。誰も知らないバーチャルV チューブだ。

光速乙女とは、つついキャッシング、略称「ツイキン」が集めた戦闘集団の名だ。秋葉に隣接する千代田区周辺を縄張りに持っている。

「目的はなんなの？ 戦闘集団って」桃華は呆然と聞く。「ほんと三国志だわ。配信三国志……」

「目的？ そんなもん知らないよ」メイドが言う。「目的なんてないんちゃう。ただのゲームなんだし」

「ただのゲームって……。危険なゲームを目的もなくやるのかよ、おい。マニュアルとか読まんのか。勝ち負けとか戦略とか、普通対戦ゲームにあるだろうよ」メイドの適当

な言に、委員長桃華はあきれる。

「まあ配信者をリアルに使った戦闘ゲームなわけで。ただし裏には操っている輩がいるのは事実。国家規模の権力を持った狂ったやつらがね」メイドが言う。「で、あのチャイナ服が光速乙女団のやり手能力者で『ちやちやみん』っていうハンドルの女なんだ。覚えておいたほうがいいよ。すぐに街中で戦闘をしかけてくるから」

「ちやちやみん、って聞いたことある。ハンドル名、^{チャオ}曹・CHARMING。WWでも昔配信をやっていた人じゃ」

「そう。金に転んでツイキンに寝返った。そんなやつらはいっぱいいるよ」
メイドは桃華を見つめる。

「私らWW配信同盟の理念はね、金じゃないんだ。心なんだよ！リアル世界が忘れ失くしてしまった一番大切な友愛というものなんだ。それをこのすきんだ社会進化論の世界から取り戻すんだよ」

「いい言葉です。メイドさんは嫌儲派なのですね」と、地味子がおずおずと口を差し挟む。「私もネット嫌儲には賛同してます」

「ありがとうございます。お嬢さま」メイドらしく、にこやかに一礼。

「ならどうして配信ではギフトもらう機能をオフにしないのよ？」と桃華が率直に聞く。「儲けてるじゃん」

うっと一瞬詰まるメイド。

「あ、あれはギフトであってプレゼントなの！心の形。金ではない」

「あ、そ。私はギフトはもらってないんだけどな。ギフトって換金できるし、いいよな！人気者は」と桃華はすねて言う。実際、メイドの斉藤蘭はかなりの美少女だ。桃華の嫉妬心が言葉にトゲを作る。

むっとしてメイドは桃華を見つめる。やけにつっこむわあ、こいつ。とタジる。
場を取り繕うおうと、地味子ミトちゃんが割って入る。

「ところで。わたしたちはWW配信同盟って名前の集団なのですね」嬉しそうに言う。「運営のダワンコ(通称・駄犬)が公式につけたのかしら？」

「いや、私が勝手に名付けた。今言ったのが最初」とメイドが適当に言う。

「このメイド、アバウトすぎ」げらげら笑う桃華。「ゼーリでネーミングがめっちゃダサでもろ前時代サヨク」と腹を抱える。桃華、結構毒舌。WW生放送でディスコメを打って鍛えている。嫉妬もからめて殴られた恨みをまだ持っている。

「お前、張飛に決定な」と桃華は言った。「私、劉備だから」

「身に余る尊称でございます。ご主人さま。いやあ。そんなに褒めないでくださいなあ」
メイドも笑う。

「褒めてないよ。ぶりっ子。デイスだよ、デイス。でもこれで殴られた恨みは帳消しにする」すっきり笑顔の委員長。「桃園の誓いよ」

こんなに楽しく笑うのは久しぶりだ。

まるでネット世界がリアルになったよう。

本音をさらけ出して笑える、友愛、を感じる出会い。

心に何の障壁もない。

バーチャルはすべての障壁を超えるんだ。

ヘッドホンガールズが結束し始めた。

秋葉に夜のとばりが降りる。

街は人工の光に満ち、活気づいている。

「さて、お腹もすいたし、これからみんなで何かおいしいもの食べに行こう」と桃華が笑顔で二人に言う。

「いいね。アキバのいい店知ってるよん。案内はこの張飛にまかせてくれ」とメイドの斎藤蘭も笑顔で言う。

「ぜひお願いします。私、初めてですよ。友達と外で食事するなんて」水戸上子も、とっても嬉しそうだ。

「続きは製品版でよんでねっ、皆の衆！」
と、いいところの劉備になって、ご機
嫌の委員長、西田桃華が、言うております。